

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

雪

平成28年2月第3週放送

この冬は暖冬になるといわれて来ました。また、エルニーニョ現象の影響で寒気の流れ込みが弱まると、南岸低気圧が接近しやすくなり、日本列島の太平洋側、即ち関東地方にも大雪が降ると言われています。さらりとした雪国の粉雪とは違って関東の雪はぼったりと重く、雪に慣れていないこともあって本当に厄介なものです。二年前の大雪を思い出す方も多いことでしょう。

雪は、全てを白く覆い尽くします。今まで見えていたものを見えなくしてしまうことから、仏教では多く煩惱に喩えられました。そして、雪を払い融かすことが修行であり、そのエネルギーは智慧の力で、やる気を奮い立たせるのは菩提心、お覺りに向かおうとする心であるとされました。

確かに、雪は恵みの水とはいいいながら、雪国であればその除雪作業は冬の間の欠くことのできない大切な重労働であり、時に命に関わる一大事ともなるでしょう。

「是がまあ つひの 栖か 雪五尺」
小林一茶は、身の丈ほどの雪に埋もれた家を見つめ、己が人生の限界を思っ
溜息を吐きます。思い通りにならないことは即ち「苦」であると仏教では説きま
すが、雪によって自由な動きを制限されることは、正に「苦」を実感することなの
でしょう。

しかしながら、雪の大きさや重さを自己の存在と比べるその一方で、私たちは全
てを覆い尽くす雪の白さに畏敬の念を抱き、雪の下に隠されたものに思いを馳せ、
やがて来る雪解けの春を待ちわびたりもするのです。

「こしかたゆくすゑ 雪あかりする」
種田山頭火は、托鉢に歩く雪の中の、ほんの小さな明かりに春のきざしを感じ
取ります。それは、人生の先行きに望むかすかな希望であり、雪が融けると心の動
きをも自由になるであろうと、夢想するさまをも暗示しているようです。

煩惱を象徴する雪で覆われることで、その下に存在する真実の有り様は、お覺り
を求め心動かしてやまない、まこと輝かしい光明に満ち満ちているのです。

春はもうすぐそこまでやって来ています。

— 終 —